

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

5月7日にチャールズタウンズで行なわれた第148回ケンタッキーダービー（d10F）を制したリッチストライク（牡3、父キーンアイズ）が、今月のこのコラムの主役だ。

競馬であるゆえ、思いもかけないことが起こるのはむしろ当たり前だが、それにしても、ここまで想定とかけ離れた事象を目の当たりにすると、人間の思考とは瞬間的に停止してしまうことを、今年のケンタッキーダービーは改めて思い出させてくれた。

リッチストライクとは、レース前日の朝の段階では、ケンタッキーダービーの出走予定馬に入っていない馬であった。

このあたり、日本にはないシステムなので改めてご説明すると、ケンタッキーダービーの最終的な出走投票が行われ、枠順が確定したのはレース5日前の5月2日だった。フルゲートは20頭で、リッチストライクは優先出走順位21番だったため、この段階では残念ながら同馬は出走枠に入ることが出来なかった。

日本ではこの時点で同馬の「除外」が確定する。だが北米にはAlso Eligible（オルソー・エリジブル）というシステムがあり、レース前日までに出走取り消しが出た場合、AERリストに記載された馬が代わりに出走枠に入ってくる。豪州にも似たようなシステムがあり、豪州で

はこれを Emergency（エマーゼンシー）と称する。ケンタッキーダービー前日の朝、馬番20番・枠番20番のイシリアルロードが出走を取り消したため、AERリストの最上位に名を連ねていたリッチストライクが、急遽出走することになったのである。

そういう存在ゆえ、現地におけるリッチストライクは単勝オッズ81・8倍で、20頭立ての20番人気だった。ケンタッキーダービーでは、1913年にドネレイルという馬が単勝オッズ92・45倍で優勝していた、これに次ぐレース史上2番目の高配当だった。

前走がターフウェイパークのG3シエラルビスだった馬の優勝は、このレースがスパイラルSと呼ばれていた時代の2011年にアマルキングダムが記録しており、11年振り2頭目。大外の20番枠から発走した優勝馬は、2008年にビッグブラウンが記録しており、スターティングゲート導入以降では、これも2頭目のことだった。

すなわち、単勝配当、臨戦態勢、枠順といった要素において、異例ではあったが、前例のない優勝ではなかった。リッチストライクのケンタッキーダービー優勝において「前代未聞」だったのが、同馬がクレイミングレースで購買された馬だったことである。

リッチストライクを生産したのは、ケン

タッキーの名門カルメットファームである。カルメット生産のケンタッキーダービー馬は10頭目で、これは歴代最多勝となる。カルメットの所有馬として、ジョー・シャープ厩舎に入厩した同馬は、2歳の8月15日にデビュー。エリスパークで行なわれた芝8Fのメイドンに出走し、10頭立ての10着に大敗した。

そして、同馬が続いて出走したのが、9月17日にチャールズタウンズで行なわれた、クレイミングブライス3万ドルのメイドン・クレイミング（ダート8F）だった。初戦では大敗したものの、調教の動きは悪くないと、この馬に目を付けていたのがエリック・リード調教師で、ここは好機とみてクレイミングボックスに3万ドルのタダを投入。前走とは一変した走りを見せて17.1/4馬身差で制した同馬の、クレイミングが成立したのである。

リード厩舎に転厩し、リック・ダウンソンのリード・ティーアール・レーシング社の所有馬となったリッチストライクは、その後5戦し、いずれも掲示板に載りながら、勝利には手が届いていなかった。だが、メイドン・クレイミングを圧勝したチャールズタウンズを舞台としたケンタッキーダービーで、馬が一変。クレイミングレースで購買された馬によるケンタッキーダービー制覇という、歴代初の快挙が達成された。